

第19回 住まいとコミュニティづくり活動助成事業 (コミュニティ活動助成部門)

成果報告会 (令和4(2022)年度助成) & まちづくり NPO 交流の集い

令和5年8月26日(土)に、「住まいとコミュニティづくり活動助成事業(コミュニティ活動助成部門)」令和4年度助成対象団体の成果発表と、令和5年度助成対象団体との交流を主軸としたまちづくりNPO交流の集いを開催しました。本年は、会場(御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターRoomC)とオンラインを組み合わせせた開催となりました。

開会挨拶

昨年度のコミュニティ活動助成の13団体の皆様に成果発表をいただき、今年度の助成団体や専門家の皆さんと一緒に、市民まちづくりNPO、まちづくりのこれからを考える会とさせていただきたいと思います。また、それぞれのご活動から、活動を継続していくための資金と担い手について、皆様共通の課題や悩みを抱えているということが分かりましたので、今日はそこに焦点を当てて考えていきたいと思っています。

松本 昭氏

ハウジングアンドコミュニティ財団
専務理事
住まいとコミュニティづくり活動
助成事業選考委員



テーマ 1: 地域資源の保存、整備、活用による地域づくり

活動報告

○旧酒蔵の跡地を活用した百年の杜づくり「とちの木プロジェクト」

……………百年の杜プロジェクト実行委員会(群馬県藤岡市)

- ・元造り酒屋であった場所で、とちの木をシンボルにツリーデッキをつくる。交流広場と100年後に向けた杜をつくる取組み。
- ・枯れてしまったとちの木の木材利用ワークショップ
→ものをつくるプロセスを子どもたちに見せる
→敷地の石や、地元産の木材を利用
→日本の伝統工法、大工道具を使う
- ・とちの実を使った染め物ワークショップ
- ・土壌づくりや植樹
- ・メンバーの得意分野で各種イベントを実施
<運営について>
- ・場所の利用法も含めて管理団体の見直し
- ・クラウドファンディング準備中
- ・子ども達を含め学校としても活動していく



青柳 幸広 さん



アダム・ズゴラ さん

○下北線路街の「植育」を通じた地域の風景づくりとコミュニティの醸成

……………一般社団法人シモキタ園藝部(東京都世田谷区)

- ・鉄道線路跡地の植栽の維持管理(鉄道会社から受託)、園芸学校の運営、カフェ、コンポストづくりなど。
- ・助成金では主にコンポスト事業を実施。循環のサイクルを大切にしており、ロゴマークも循環を意識したもの。
- ・各種イベント開催: 植栽管理で出た枝葉を使ったリースづくり、落ち葉や雑草を使った堆肥づくり、まちなか園芸教室、道草ファーマシー、造園屋でもらった藁や柑橘の実でお正月飾りづくり等
- ・まちの果物屋、蕎麦屋、コーヒー屋などの協力でパルプをコンポストに活用
<今後>
- ・キエーロ(家庭用生ゴミ分解装置)や、堆肥(下北沢の土)の販売を検討中



村越 文 さん



斉藤 吉司 さん

○民間交通公園を引き継いだNPOによる多様な公園リノベーション活動

……………NPO法人桂公園こどもランド(新潟県十日町市)

- ・民間交通公園をリノベーションし、ゴーカート、バッテリーカーを走らせている。
- ・老朽化が進んだ公園を低予算で見栄え良くするため公園全体に花植え。ひまわりや菜の花など。
- ・子育て家族がテーマパークのように楽しめるよう、カラーボールやシャボン玉で非日常を演出
- ・保育園などと連携してイベント実施
- ・社会全体での子育てを目的にウェブフォトイベントを実施し、地元協賛スポンサーが賞金贈呈
- ・運営側のメンバー間でのコミュニティづくりにもつながる
- ・運営には高校生ボランティアも奮闘。子育てが一段落したシルバー世代と、未来の子育て世代が、現役子育て世代をサポートする社会全体の子育て。



大島 満 さん

○多世代・多国籍な住民が暮らす京都養正学区におけるまちづくり活動

…かもがわデルタフェスティバル実行委員会(京都府京都市)

- ・古い市営団地の建て替え更新・集約が進められており広い跡地ができる地区
- ・団地内に自治会は存在しない
- ・古くからの外国籍住民、留学生など多国籍な地区
- ・地域のコミュニケーションづくりとしてお祭りを復活させるための実行委員会を組織
- ・跡地活用の検討の窓口としても活動をはじめ、まちづくりミーティングを昨年から10回開催
- ・跡地利用に限らず多くの意見が出され会議は紛糾
- ・会議内容の地域への周知、まち歩き開催、ワークショップなどを経て意見書を集約、京都市に提出
- ・今年度も助成を受けて活動。地域の中でのコミュニケーションを円滑にする活動を継続し、その意見集約を図るような仕組みや、地域自治を担っていく団体の設立などに繋げていきたい。



杉山 準 さん

○自治会等の集会所をNPO支援で「地域の居場所」にする活動

……………NPO法人コミュニティかりば(兵庫県神戸市)

- ・40年が過ぎた西神ニュータウン
- ・地区に複数ある自治会等の集会所を、NPO支援で地域の居場所にする活動を展開
- ・まちの居場所について全戸意向調査を実施。その必要性や、現在の集会所の利用頻度などを把握。
- ・数字の裏付けにより行政などへの訴求力も得た。
- ・活動の担い手の掘り起こしとして、地域ボランティアを考えるセミナー、アンケート調査の報告会などを実施、新戦力も獲得。
- ・げんきサロンも発足

<今後>

- ・団地集会所の利用促進のためのソフトが必要
- ・中間支援的な取組の継続のため、担い手と財源の確保が課題



佐野 正明 さん

Comment

- ・地域資源はそれを元手に価値を増やしていけるもの。普通の人がこれはダメだよ、ね、と思っているものに価値を再発見して共有し、資源を使い倒して色々なものを再生産して、それが自分たちにも返ってくる、そんな活動ができています。
- ・資源があり支援者から見ると磨いたとしても良くなりそうなものだが、まだ地元の人その価値を共有していない段階の活動もある。遠い道のりかもしれないがぜひ頑張してほしい。
- ・木や草は放っておいたら生えてくるもので、1年を通して実を収穫したり草抜きの世話をしたりという活動がある。それぞれの団体の資源とその使い方を共有していただくとよい。



選考委員長 饗庭 伸 氏

- ・まちの宝物を見つけてまぜることがヒントになる。(理事 若林 朋子 氏)
- ・行政とどれだけ連携していけるかがポイント
- ・若い人は生活が不安定で、活動を担えない。時間はかかるかもしれないが教育を通して、私たちが主権者で、自分たちの暮らしを自分たちがつくるということを子どもたちに伝えていくことが大事。
- ・公共の福祉のためにやっているということを、こういった場で伝えられるのはありがたい。(せたがや水辺デザインネットワーク)

「協働」のあり方を再考する 若林 朋子 氏

ハウジングアンドコミュニティ財団 理事



今の時代は、1団体や1組織だけでは、活動継続や課題解決も困難です。関係者間の協力が一層不可欠で、パートナーと協働していくために共通の目的を持ちましょうと言われるますが、目的を無理に擦り合わせると協働はなかなか長続きしません。そこで私が昨年知った考え方をご紹介したいと思います。

「三項相利」というもので、協力の輪を広げる鍵です。協力は、自分のやりたいことに他者が協力してくれるものとする向きもありますが、そうではない協力の型を知ろうということです。協力1.0、2.0、3.0ってあるそうなんです。1.0は共に目的が同じで一緒に活動するタイプ。ともに目的は同じでも、主役Aがいて、主役AにBが協力するというタイプの協力2.0。そして3.0は、目的は違っても、同じ目標を達成することでそれぞれの目的を達成するという形の協力です。

目的と目標の違いですが、目的は最終到達点。実現したい内容で、長期的、抽象的でもあります。一方、目標は目的を達成するための具体的な方法であり指標、中間のステップですね。そして短期的なものです。つまり、お互い目的は違っても、短期的あるいは具体的な目標は合致させることができる、そういう同じ目標を持てる仲間を地域で広げていこうという、そういう考え方です。

例えばAは子供食堂、Bは地域のお惣菜屋さんだとします。全く別の活動に見えますが、ゴミを減らして地球に優しい活動を行うという目標は一致している。そうすると共通のコンポストを持つこと、コンポストから作った堆肥で野菜を作ったりして共同で活動すると、仲間も広がり、お互いやりたいこともでき、野菜も育つかも说不定。つまり、子供食堂とお惣菜は全く別の目的ですが、共通の目標においては協力し合うことができる。こんな協力のあり方もあるということです。

もう一つ、そうした新しい協力関係を広げるためには、中間支援力とかコーディネート力を強化していくことが欠かせません。私はかつて中間支援組織にいましたが、ある時、中間って何の中間ですかと素朴な疑問を投げかけられました。一体誰と誰、何と何の間を取り持つんだろうと意識するようになったら、かなり周りが違って見えてきました。社会には様々な間があり、間というのは違いの宝庫です。ミッションや振る舞いも、優先順位や価値観、言葉も行動原則、予算規模や困りごととも違う。そういう方々の間に立って、繋いで中間支援していく。違いを認識をした上で繋いでいくという、その人材が非常に重要ではないかと思えます。無理に違いを埋めないけれども、違いの共有と通訳をするコーディネーターの確保が協働においては重要です。

Q&A

・参加の度合いをステージ化することが仲間を増やすポイントになる。どんな位置付けか？

百年の杜プロジェクト実行委員会

- ・メンバーもそれぞれ生業がある。できる内容をそれぞれが担っている。
- ・来てくれた方の笑顔や個人の繋がりで支え合っているが中心メンバーが疲れてしまうことも。
- ・学生ボランティアなど若い力に期待するということも考えていきたい。

シモキタ園藝部

- ▷参加しやすい雰囲気づくりの工夫は？
→毎月土曜日に園芸デイという誰でも参加できるイベントを開催、それほかニューカマーデイも。
- ▷参加の度合い
→理事社員(出資)、部員に分けて設立。実際の活動はフラットに参加している。
- コアに携わるプロジェクトリーダーも設け、なるべく多くの人に参加してもらうよう工夫
- ・まさにまちの資源(宝物)探しをしており、それにより色々な人が集まり工夫ができる
- ・拠点の場所を借りており運営費用が悩みである。

・取組の持続性のために必要なものは？

桂公園こどもランド

- ・ランニングコスト:市の児童公園として維持管理費、自治会などから協賛費。しかし人件費は出ない。
- ・メンテナンスのためゴーカートはやや使用料が高め。人件費はボランティアなのが悩みで、指定管理で賄えるとよい。
- ・参加の度合い:シルバー、高校生の2枚看板

かがわデルタフェスティバル実行委員会

- ・団地内にある、市民活動の中間支援を目的とした施設の指定管理をNPO法人でうけており、NPOが呼びかけ人となって自治会など各種団体を繋いで実行委員会を形成
- ・参加の度合い:NPOと小学校区単位の自治会役員が中心となって活動

コミュニティかりば

- ・集会所の運営は第三セクターが委託をうけている。活性化という同じ目的を持っているので、補助金なり委託なりで行政とうまく連携できるとよい。

テーマ2: コミュニティにより地域の持続性と活力を育む取り組み

活動報告

○まちの止まり木、人の繋がりをつくる黄色い幸せのベンチ設置プロジェクト

…かがいや幸せのベンチプロジェクト実行委員会(群馬県前橋市)

- ・多職種が参加(看護学校、中学校の先生や生徒、行政職員、社会福祉士、ケアマネ、町内会役員など)
- ・150センチ幅の黄色いベンチをまちに設置。行政の手が届かない、家の周りの移動のため200mおきにベンチを設置。
- ・ベンチのナンバリングと消防、警察との連携により防犯、防災機能を付加
- ・wi-fiの設置(敷地にベンチ設置の店舗内)、買い物同行支援など
- ・イベント実施(2万円の寄付でベンチを設置、メンテナンスし、寄付者がそのベンチ周りのイベントも企画)、シンポジウム開催
- ・活動内容を冊子化→市内での横展開につながる
- ・今後:ベンチ設置の情報発信、次世代に参加してもらえる取組を続けていく。



森下 達也 さん

○高校生が地域と関わる「まちの文化祭」「まちの部屋」「まちの部活」事業

……………NPO法人せき・まちづくりNPOぶうめらん(岐阜県関市)

- ・戻ってきたい町になっていく、まちで働くイメージを持ってもらう
- ・まちの文化祭「せきうちマルシェ」:
地域の高校2年生が半年間、地域の人がもつ技を伝授してもらい、イベントを実施(着付け、美容師によるマッサージ、お弁当づくり、ノート開発など)
- ・まちの部活:
もっとやりたい高校生と商店とのコラボによるシャッターアート、ジビエ開発
- ・自走のためのまちの部室:多世代が集まれる施設を選定、周知
- ・財源:独自の教材をつくり学校の探求の授業で使ってもらう、自主事業、寄付など
- ・団体は市の市民活動センターの運営も担っているため、色々な団体と連携して活動実施



田原 晃成 さん

○外国人集住の保見団地における移動屋台を活用したコミュニティ活動

……………NPO法人トルシーダ(愛知県豊田市)

- ・外国籍住民が多い団地での、日本語教室を軸とした居場所づくりの活動からスタート
- ・団地内に数多くある公園や広場を起点に、人のネットワークをつくる試み
- ・高齢化が進み、集会所にアクセスできない人も多いことから、広場に出向くことを企画
- ・ゴミステーションの景観の悪さは、外部空間を活用した取組により良くなっていくのでは(仮説)
- ・DIYによる公民館制作ワークショップ、フリーコーヒー、青空本屋、ゴミ拾いなど。団地外から訪れる人も。
- ・団地ビジョンづくりにも協力したほか、自治区や大学と協働での拠点開設
- ・活動資金の確保は課題



筒井 伸 さん

○山間地域の閉校校舎を活用した暮らしの安心拠点づくりと公共交通網見直しの提案活動

……………越知谷大衆交実行委員会(兵庫県神河町)

- ・地域包括ケア推進や地域自治協議会への移行にむけての拠点づくり
- ・廃校になる小学校を活用
(もともと福祉利用を視野に入れ平成16年に建て替えられた小学校)
- ・校舎を使いたいという住民(主に女性)の要望
- ・バスを小型車両に変更し、地区内にバスが寄る場所をつくる
- ・図工室、家庭科室などを地域の人がシェアしながら活動+リーシング
- ・茶摘み、子どもイベントや草木染、マルシェなどを通したネットワークづくり
- ・田舎であるため地域の人へ出向いていくことも大事
- ・工夫しながら外の人も呼び込み、コラボしながら活動
- ・周辺都市に居住し、田舎である越知谷に通いながら活動するメンバーも。



一宮 大祐 さん

Comment

- ・任せるのが上手。完璧にデザインし過ぎず参加する余地を残す。ベンチまわりの使い方はアイデアを募る、まちの部活も相手に委ねて内容を考えてもらう、など。
- ・仮説を立てて実践実証して振り返るサイクルを作っている。いいところを惜しみなく横展開する(コンセプトブックや将来ビジョンに生かしていく、など)
- ・非資金的支援を得ている。お金ではないアイデアの協力、人、もの、空間、知識、技術、情報など。
- ・独自財源がどこにあるか探すのも大事。
(理事 若林 朋子 氏)

- ・イギリスでベンチに「このベンチに寄付した人はまちで40年ポストマンをして、×年×月に亡くなった。地域の人に愛されていました」といったプレートが貼られていた。そういった方の遺志をきちんと表示することは、まちの人にとってうれしい。



監事 小場瀬 令二 氏

- ・かいがや幸せのベンチプロジェクト実行委員会：
ベンチの広がり自分たちのまちの広がりになっているのが面白い。また、ベンチを使っている人が黄色くなっていて自分たちのおばあちゃんになっていくというように人の動きに繋がるとよい。
- ・せき・まちづくりNPOぶうめらん：
雇用のマッチング。後継者を探している工場に高校生やUターンしてきた人を紹介するような事業に展開しては。
- ・トルシーダ：
移民の方と高齢者の人がどうつながるか。例えば移民の人はコーヒー、おばあちゃんはほうじ茶を売るとか、移動式スタンドを色んな人に使ってもらおうと、また工夫が始まるのではないか。
- ・越知谷大楽交実行委員会：
日本は誰も見たことがない高齢化社会になってきている。昔は高齢者は皆福祉の対象だったが、そうではないというの分かってきたので、高齢化社会のイノベーションがこれから起きるのでは。期待の持てる取組みだと感じる。
(選考委員長 饗庭 伸 氏)

- ・楽しさの見える化。ベンチや移動公民館のように外に出していくのは大事なこと。
- ・集落の盆踊りのように、楽しさにお金や人を巻き込む仕掛けがある。



評議員 木下 勇 氏

Q&A

かいがや幸せのベンチプロジェクト実行委員会

- ▷それぞれの活動の協力団体、協賛者はどのように選んだり開拓しているのか？
- ▷70くらいあるベンチの設置場所はどうか確保？
- 活動のリーダーは地域包括支援センターの本業をやりながらベンチの営業も行い、協力者を広げている。
- ・任せること、エンパワーメント的な視点は意識している。話し合いの中で、福祉系の事業者の方から、全部お仕合せではなくその人なりの盛り上げ方をうまく表現できるとよい、という意見があり、それがとても賛同を得られた。
- ・自分たちの想いを言語化するためにコンセプトブックを作成
- ・公共空間はベンチ設置の許可がおりないので、ほぼ民地。寄付者にベンチの日常の管理も任せており、補修の必要があれば連絡してもらおう仕組み。
- ・参加しやすさとわかりやすさ。2万円を渡すとベンチが来て、自分も福祉のまちづくりに参画できるという分かりやすいコンセプトで、それだったら自分もできるという方を掘り起こしていけるのが強み。

トルシーダ

- ・経済事情でキーマンがブラジルに帰ってしまうなど、自分たちの力ではどうにもならないこともある。長期的なビジョンを持つことが難しいが、その都度対応していくことが横展開にもつながった。
- ・例えば日系の人も1世から4世まで、最近ではウクライナの人も住み始めており、違いよりも共通項を見つけることが大事。コーヒーやDIYを介して交流している。

せき・まちづくりNPOぶうめらん

- ▷17年目ということで、町にはどのくらい若者が戻ってきた？戻ってきた若者はぶうめらんで活動していた学生？
- ▷活動を通して地域の繋がりで変わったことは？
- 実際に若者が帰ってきているかの数字の調査は行えていないが、自分自身が今年戻ってきた。地域で活動する大人を高校生が取材し作成する冊子「ぶうめらん」を読んでいた。
- ▷高校生が関わるようになったきっかけは？高校とはどのように協力関係をつくっていったのか？
- コロナ禍で、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けている高校が、より地域の探求活動に力を入れていこうという方向になり、ぶうめらんも協力している。



選考委員 竹沢 えり子 氏

越知谷大楽交実行委員会

- ・いろんな関わりしろがあり、イベントの時におはぎをお願いした方がお客さんも連れてきたり、バスの試乗会で添乗員を頼むと足の不自由な方も連れてきてくれたり、何かを頼むことでその場所に入りやすくなることもある。
- ・仮説は自分なりに当たっているが、勉強会形式は人はあまり集まらないので、数人での共有にとどめている。
- ・田舎ではあまりお金はかからない。会費などで運営しているという。

テーマ 3: 共助により地域の絆と福祉、地域の安全などを高める取り組み

活動報告

○廃校校舎を活用した地域コミュニティ×障がい児福祉の拠点づくり

……………NPO法人水梨かふえ(宮城県気仙沼市)

- ・山間部での活動。8年前から高齢者サロンを月2回開催。
- ・小学校が廃校になったことをきっかけにキッズカフェを開始。1世帯2000円の会費で、高齢者サロンのメンバーが郷土料理などを子どもたちに提供。毎回120人ほど参加。
- ・市内の高校生ボランティアもキッズカフェを手伝う。
- ・多機能事業所では障がいのある子ども達のリクエストで野菜の栽培、イベント開催、バス待合所のペンキ塗り替えなどを実施。
- ・市のイベントに出店し自分達でつくったものを販売。売り上げを子どもたちに分配。
- ・お年寄り子どもが名前呼び合えるような関係になっている。



熊谷 俊一 さん

○生活困窮者の孤立防止のための居場所づくり活動と居宅訪問活動による支援

……………NPO法人ほっとプラス(埼玉県さいたま市)

- ・居場所づくりの活動:ホームレス状態や高齢、障がいがあるなど生活困窮状態にある方が対象。カラオケ、卓球や、専門職による体操、弁護士や看護師、社会福祉士など専門職との相談・交流
- ・ボランティア実習生の受け入れ
- ・これまでに支援した方に案内状を兼ねて往復ハガキを送付。会に参加はできなくてもつながりを保ち、相談や安否確認を行っている。
- ・ほぼ単身世帯であるため、居宅訪問活動として体調面や困りごとの相談、各種手続きなどをサポート
- ・いこいの会参加者同士での助け合い
- ・当事者であるピアサポーターの雇用
- ・会報誌の発行



平田 真基 さん

○地域で創るコミュニティカフェと社会的自立に向けた活動

……………一般社団法人かけはし(神奈川県横浜市)

- ・小学校の教員を退職し、不登校の子どもたちのための学校以外の居場所をつくるため夫婦で団体を立ち上げ
- ・空き家で拠点開設。当初は住宅街のなかに不登校の子ども居場所をつくることに、地域の自治会などから猛反対を受けた。
- ・就労支援のためのコミュニティカフェでは現在8名の若者を雇用
- ・買い物難民のための敷地内での移動販売車、自治会へのスペース貸し、自主事業としての各種講座開催、祭りへの協力などにより、地域にも認知、参加してもらえるように。
- ・学べる駄菓子屋:カフェで宿題をすると30円分のお菓子をもらえるシステム。地域の子どもの向けに実施。
- ・現在は赤字経営であることが課題



廣瀬 貴樹 さん

○シェア型図書館等を拠点に健康相談等に応じる社会的処方活動

……………一般社団法人ケアと暮らしの編集社(兵庫県豊岡市)

- ・支援の雰囲気があると訪れにくいので、おしゃれな図書館にケアや支援もさりげなくあるような環境づくりを意識して開設
- ・まちとケアをつなぐ、図書館型の地域共生拠点
- ・保健師1名常勤。週1回相談所を設け、孤独孤立の相談を受け付ける。必要に応じて外部のサービスを紹介
- ・ハローワークや地域包括支援センターとも連携
- ・各種イベント、当事者の話を地域住民が聞く会、ご飯会などを開催
- ・一箱オーナー型の図書館を設け、棚の賃料から人件費や家賃を支出
- ・本を入りに、ここなら相談できる、と相談→居場所利用→講師を担う、研究室活動に参加、当事者ではあるが子どもの居場所を考える、店番を担うなど、支える側にも回っている。



守本 陽一 さん

Comment

- ・活動場所の空間を閉じないで、誰でも使ってもらえるよう開く。運営組織も閉じることなく、緩い関わり度合いでも関わられるような仕掛けが必要。
- ・それぞれの役割を見つける、持たせることで主体的な関わりになる。



選考委員 山田 翔太氏

- ・生きづらさを抱えている方が気負わず主体的に関われる、尊厳を引き出されることに、とても配慮されていると感じた。
- ・そういった方が長い期間、安心して通うことができるよう、居場所が継続していくことも大事。
- ・行政との関係づくりや、社会的事業への企業版ふるさと納税を継続的にやっていくこともよいのではないかな。



評議員 椎原 晶子氏

- ・助成事業の対象の方がどんどん広がって、ついにはここまで来たのかという感慨がある。社会的困窮者の方がコミュニティと繋がる、地域の方と協働することなしには解決しない、ということが助成に現れている。
- ・まちづくりの側はこういった問題に対してどういう態度をとっているのか。楽しく活性化するだけでなく、コミュニティが抱える問題にも対応できるシステムを持つべき。コミュニティ側もフレキシブルなお金の使い方、地域自治への行政の支援を広げていく必要がある。



顧問 小林 郁雄氏

Q&A

水梨カフェ

- ▷廃校活用の理解を得るまでのプロセスは？
→廃校活用は市に直談判して、署名と、福祉施設の要望を出した。
- 最初は反対した地域も、今は子どもがかわいい、と協力
- ・福祉施設は利用者が多く経営が成り立つが、まちづくりと会計は別。まちづくり活動は地域からの会費や、お金でない支援、お金のかからない方法+助成金
- ・校舎の福祉施設への転用は費用がかかる。借金を返済中。

ほっとプラス

- ・収入はホームレス支援のサブリース、グループホーム運営、寄付などが厳しい。遺贈の問合せがきたことはある。
- ・地域の反対はあるが、地域活動に協力しながら理解を得てきた。

ケアと暮らしの編集社

- ・収入は本棚収入、社協からいくらかの助成金
- ・マンスリーサポーターとして寄付を募りたい。
- ・SNSには子どもがいいよ、といっても写真はあげない。本人とご家族がOKな時のみとしている。

かけはし

- ▷住宅は借りたもの？資金はどう回している？
→住宅は借りており、カフェも赤字である。畑を無償で借りて野菜を育てる、農家さんからも野菜、米を寄付してもらっており、買うのは肉と卵など。
- 月謝は月5000円、ただし経済的困難を抱えている家庭は1500円としている（通常のフリースクールは3.3万円）
- 人件費はキッチン責任者、若者人材育成責任者の2人と若者のアルバイト代。あとは自分自身含めボランティア。
- 寄付をいただいたり、不登校の居場所づくりの教育員会の委託を今度から受けられるが、子どもたちは現在70名ほど。元教員も雇用しており、その人件費で使い切ってしまう。
- ・障がい者手帳がない若者への公的支援、企業の雇用が得られるようになるよう、実績をつくっているところ。
- ・教員をやめた時に3年間は体を張ると決めて、今は自己資金を使って活動している。
- ・事業収入をどうやっていくかが悩みの種。

全体討議

- ・いかに楽しくやるか。楽しいことに助成金を使ってはいけないということがあるが、お酒を飲むのもよい。公共のお金を使って楽しくやることを認めさせる運動もしてよいのではないかな。（顧問 小林 郁雄氏）
- ・小さな事業を回すことで、持続するという形もある。支出を減らすことも大事で、実際の活動の中ではかかるはずのものをかからないようにしてきた。家賃なしで都心で家を借りるなど。マネタイズとアンマネタイズである。（評議員 椎原 晶子氏）
- ・コストの因数分解。細かく分解していくとお金じゃなくてできることもある。
- ・最後は人である一方で、最初から人でもある。活動の意図が伝わるよう、団体の趣意書をホームページなどに記しておいてほしい。（理事 若林 朋子氏）
- ・ケアに関する取り組みのように、空間とまちを使ってあらゆる課題を解決する。つくるというより使うこと。空間は、例えば全然知らない人が空き家でのカフェを見て、いいなと思ってやってくる。これがリアルな強みである。
- ・安定して食べていけるNPOはほとんどない。無理である、ということをきちんと言語化していく、自治体や県に言う、国に上げていくことをしてほしい。
- ・自己責任でお金を取ってこい、という話にどんどんなっているが、こんな素晴らしいことをやっけてこれだけ赤字である、と言語化して伝えないと社会が変わらない。（選考委員長 饗庭 伸氏）

全体討議（続き）

- ・頼れる相談先をできるだけたくさんつくる、自分達だけで抱え込まないことが持続性につながる。
- ・まちの人への周知には対話をし続けることが必要。
（選考委員 山田 翔太 氏）
- ・エクスクルーシブな社会の分断が進んでいる。障がいや不登校を自治会が知らない。偏見のためか、ただ知らないからか、そこにポイントがあるが、草刈りなど、人間の行動を見て信頼ができていく。自治会や団体がそういった課題に対応してインクルーシブな社会にしていくことが求められている。（評議員 木下 勇 氏）
- ・高校生が参加することによって、何年後かに戻ってきて地域の中で根付いていく。例えば20歳くらいから都会に出て仕事をして、60歳に定年になってもまだ40年ある。40年都会で働いて、40年地元に戻ってくるというライフスタイルがこれからはあるだろう。地域で活動している人がいることによって、より帰りやすくなる。これは大切な機能なのでぜひ頑張っていたきたい。
（監事 小場瀬 令二 氏）

令和4（2022）年度コミュニティ活動助成団体

NPO法人 水梨かふえ（宮城県気仙沼市）
かがや幸せのベンチプロジェクト実行委員会（群馬県前橋市）
百年の杜プロジェクト実行委員会（群馬県藤岡市）
NPO法人 ほっとプラス（埼玉県さいたま市）
一般社団法人 シモキタ園藝部（東京都世田谷区）
一般社団法人 かけはし（神奈川県横浜市）
NPO法人 桂公園こどもランド（新潟県十日町市）
NPO法人 せき・まちづくりNPOぶうめらん（岐阜県関市）
NPO法人 トルシーダ（愛知県豊田市）
かもがわデルタフェスティバル実行委員会（京都府京都市）
NPO法人 コミュニティかりば（兵庫県神戸市）
一般社団法人 ケアと暮らしの編集社（兵庫県豊岡市）
越知谷大楽交実行委員会（兵庫県神河町）



Housing and Community Foundation

一般財団法人 ハウジングアンドコミュニティ財団
〒105-0014 東京都港区芝2-31-19 バンザイビル7階
TEL:03-6453-9213 FAX:03-6453-9214
<http://www.hc-zaidan.or.jp/>